

られるのである。しかし現場においては、指導をおきざりにして、指導計画の作成にうき身をやつしている場面もあるのである。

ここらでもう一度、戦前の倉橋惣三の考え方をじっくりみつめなおして、保育の発展のあとをふり返りつつ、保育そのものの反省をするのもよいことだと思ふのである。

指導計画の作成に熱をあげていると、いちばんたいせつな幼児

夏休みのための読書のすすめ

「日本のむかし話」三卷

村山桂子



のことを忘れて、とんでもない落とし穴が足もとにあるのに気づかない場合も多いと思うからである。そして、いわゆる「ねらい」だとか、「単元」「主題」「六領域」のとりこになってしまわないとも限らない。

選集には、他にもよい著作があるが、その紹介は省略するが、もちろんそれらについてもよんでいただければと思う。

私は、四歳になる娘のために、毎日、いろいろな絵本や、お話

の本を読んでやります。と、いうより、読まされているのですが、そうした本の中から、子どもばかりでなく、私たちおとなが読んでも、たのしい本をみつめました。

私は、その本を、みなさんにおすすすめしようと思ふのです。

それは「日本のむかし話」(松谷みよ子・文 瀬川康男・絵

講談社発行 全三卷 各五三〇円)という本です。

ここにてでくる数多くの民話は、もちろん安直に書かれたダイジェスト式のものではありません。著者である松谷氏自身が、日本の各地へ出かけて採集した民話の原話をもとに、松谷氏が自身自身の文学として仕上げたものです。単純で明解な、しかも土のにおいの失われていない文章は、まことにみごとです。

たとえば、よく知られている「つるのよめさま」の書きだしの文章は、こんな調子です。||むかし、あるところに、おとうにも、おかあにもはやくしにわかれ、たったひとりであらうしているわかものがおったそうなの。

ある日のこと、わかものは、山へ木をきりにでかけた。おもたにおのをふりかぶり、力いっばい木をきっていると、すぐ目のまえに白いものが、ひらひらとおちてきた。

みればそれは、つるだった。||

実に、むだのないわかりやすい文章で小さな子どもたちにも、よくわかります。

私の小さな娘は、この民話集の中のお話を、毎日、ひとつずつ読んでもらうのを、とても、たのしみしています。

この本の帯にも||日本の幼い友だちに、心をこめて、この本をおくりまします||と書いてあるように、たしかに、これは子どものた

めの本です。

しかし、私は、この本を子どものものとか、おとなのものとか、わけようとは思いません。

とにかく、この本は、おとなにも、子どもにもたのしい本です。

貧しい民衆によって、語りつがれてきた民話、それ故に、人々のよこびや、悲しみや願いがこめられている民話……。

そのような、民話のなりたちを考えながら、よく知っている「ももたろう」「さるかに」などのむかし話を、おとなになったいま、じっくりと読んでみるのも意味のあることだと思います。

また、この本の表紙をはじめ、随所に見られる瀬川康男氏のすぐれたさし絵は、この本を、いっそうたのしく、格調の高いものにしていきます。

日本保育学会における研究発表および総合的文献目録を収め、幼児文化財、保育関係団体、保育者養成機関、保育行政、保育および保育学の動向など内容も豊富。

世界にも余り類例を見ないものである。保育関係者にとって、必要不可欠の文献である。

新刊

一九六七年版

保育学年報

B 5判256頁/定価2300円/日本保育学会編/フレーベル館発行

山下俊郎